

蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

第6回

人間コミュニケーション論

その2

団 士郎

前回は書いたように、私は「教師職」として素人だ。教育を担当する者として、基本的な訓練や教育実習のような体験が全くない。更にいえば、他の分野に関しても似たようなものである。心理臨床に関しても、大学の心理学専攻の経験だけで、体系的に心理臨床教育を受けたとはいえない。弟子入りをして、一からたたき込まれるような経験がほぼない。

そんな中で出来ることの側で奮闘はしてきたつもりだ。だから専門分野において、何事かが分かって言うのではなく、分かっているかどうかは不明なところがあるが、私はこんな風にやってきて、七〇歳になる今日まで何とかしてきたという話だ。これは謙遜や卑下ではない。二分するならば自慢に近い。寄るべき大樹の陰を持たず、自分で植えて、育てた木陰での物語なのである。

もしかすると門外漢の戯言、あるいは、教育された人には常識のことも多々あるのだろう。にもかかわらず、あえてこのスタンスで何かを発信するのは、専門とする人達が作り出した世界が現状でしかないじゃないかという批判がこころの中にあるからだ。

私は権力や支配権を持たせてもらったことがない。公的責任を権限と共に与えられたこともほぼない。だから自分の立ち位置に経時的変化は少ない。しかしその立ち位置の人達が多くとりがちな、傍観の批評家になるつもりは昔からなかった。それは空しい立場だ。漫画家をしていてそう思った。

だから中心にいて権力や権威を持つ者ではなく、周辺にいて揶揄する勢力でもない者になろうと考えてきた。それこそが私の言葉でいうと正当な改革者なのだが、なかなか道は遠い。

「人間コミュニケーション論」の全体には、そんな私のスタンスからの発言が随所に含まれている。分かる学生にはとてもよく届くが、「これが授業か?」、「試験はどんな問題になるのだ?」と発想する者には雲をつかむような時間になっているのかもしれない。それだって、経過と共に伝わるものがあると確信しているが、中には終始理解不能のままドロップする人もある。

だが世界はそういうものだ。ひよっとしたらあるかもしれない読者の「何を書いているのか、訳が分からない!」という声も一部には想定しながら、授業で行っていることを書いておこうとしている。

大学の授業には毎年度はじめ、学生の受講登録に向けてシラバスを書く。毎年、少し手直しするくらいで大きく変えることはない。2017年度用のシラバスを以下に示しておこう。

シラバス

授業の概要と方法

対人コミュニケーションには言語的なものと、非言語的なものがある。そして人は圧倒的に多く言語的コミュニケーションを使う。そこではしばしば得意、不得意の意識が生まれる。その結果、「人見知り」、「口べた」などという説明を自分に貼り付けてしまう。

一方、得意だと思っている者は、自分のコミュニケーション技術を振り返ってみる機会は少ない。上手くやれていると思っているものを、見つめ直す必要は感じないのが当然である。その結果、若くして身についた技術のまま、二十代、三十代を過ごしてしまうことになる。

また、得意な者も苦手な者も、非言語的コミュニケーションは、自覚することが少ない。自分の振る舞いが他者の目にどのように映っているのか、気にはなるけれども、明らかにされる機会はそうない。ここにも焦点を当てる。

対人コミュニケーションには「スキル(技術)」と「コンテンツ(内容)」の二つの課題が存在する。当然のことだが、人はコンテンツ(伝える内容)とプロセス構築力(伝達手段技術)の両者がうまく備わってはいじめて、関係の場に自信を持って立てる。

大学の授業としては少数派の実習形式で毎回、課題に挑戦してもらおう。教室はコミュニケーションの「ジム」だととらえてもらいたい。だから出席しない者には意味がない。

対人関係が苦手な者は少しの勇気と共に、得意だと思っている者は、持ち味だけで一生過ごせるわけがないことを内省しながら受講の決断をしてほしい。

受講生の到達目標

まず、対人コミュニケーションにおける自身の特徴を自覚する事から始める。そこで発見される課題に各自が取り組む。エクササイズは毎回提示するが、どう取り組むかは受講生に委ねられる。教室は知的情報取得の場ではなく、コミュニケーションの練習場になる。到達目標もそれぞれのコミュニケーション能力の、更なる一歩前進である。

付け加えると、ここで目指すのは一般社会への適応、順応力だけではなく、もう一歩踏み込んだ、社会と関わる力の養成である。この実習で身についたものが、受講生の将来のいつの日にか、役立つことを願う。

この後、授業全15回のスケジュールと評価方法などが記されている。そしておわりに、

毎回、授業の最初に絵物語提示とその相互フィードバック時間を設定します。終了時に提出するレポートの課題①はこれに関する記述です。遅刻するとこれが書けません。時間厳守で入室してください。

続いて、前回エクササイズのフィードバックと新たなエクササイズ(小グループでの実習)を毎回実施します。遅刻は実習の妨げにもなるので、原則入室を禁じます。

長い間、受講生は女子学生中心でしたが、2016年には男女比率の逆転がありました。男子学生にとって、この実習の持つ意味が浸透してきたのかもしれない。

さて

正規の受講登録はまだだが、二回目からの進行が、授業の基本的なスタイルになる。それは以下のようなものだ。(1~3回目までは最初に、授業全体の進行をパワポで示しておく)

90分の構成

基本パターン

エクササイズだから繰り返しが重要
プログラム(その日のコンテンツ)によって
深めてゆく

- パート1 紙芝居漫画 見る 語る
- パート2 前回レポートへのコメント 解説 聞く
- パート3 今日の体験実習 する 語り合う
- パート4 体験や感情の言語化・文章化 書く

た
彩子
が
グ
ル
ー
プ
の
筆
頭
だ
と
言
わ
れ



翔子の母親に
「いじめっ子グループ」と
名指しされた
六人が残った

私の手元には先週、第一回授業の終わりに出席者が書いて提出した授業レポートがある。書かれた感想、意見、学びの要約、疑問をこの日までにすべて読んで、気になる事には寸評メモをしたり、アンダーラインしたりしてある。

前回、逃げ出した学生は多分来ていないだろう。未だ受講登録完了にはなっていないので、出席簿も用意されていない。

近年、どこの大学の授業も同じだろうが、学生達の出席率は非常に高い。こんな感想を持つのは、七〇年代に学生であった自分の中に、1,000人規模の大教室に、50人未満の出席という教室風景が希ではなかった記憶があるからだ。当時、自分も渦中の一員であったから、ずいぶん変わってしまったなあと思っている。

第2回授業

スタートは前回書いたように、マンガ「木陰の物語」のライドショー約5分である。今回はタイトル「いじめた側の」という作品を見てもらう。

その後、二人一組になって、感想を話し合ってもらおう。「いじめ」問題は学生達に身近な体験を持つ者も多く、話し合いは活気を帯びる。

しかしこれはあくまで、ウォーミングアップ。教壇で私が注意しているのは、相手を見つけれず、何かしているかのように振る舞っていたり、うつむいて微動だにしない学生の事である。ペアになった者達が、何を話し合っているかは気にしない。

4分の予定時間でタイマーの音が鳴り、どんな話の展開があらうと、そこで中断する。

パート2

「はい、では人間コミュニケーション論、テーマに沿って、進めていきます。先ず、前回書いてもらったものについて、私からフィードバックしたいと思います。

出席した人は記憶にあると思いますが、前回は[good & Bad]というエクササイズをしました。

それについて、こんなレポートがありました」と、いにしえの深夜放送の進行よろしく、リスナーのはがきに答えるかのようにあれこれ連想的にコメントしてゆく。

Good & badに関して、毎年、みんなが書くことの一つは、「こんなに聞く側が影響力を持っているなんて、今まで思ったことがなかった」。

話している自分ばかりに関心が向いた

り、話の中身がウケる事だけに必死だから、こんな風に思ってしまう。

しかし、俯瞰してみれば対話空間の活性は、話し手と聞き手の呼吸で成立している。誰かの話が済むのを待っているだけの、おしゃべり集合グループはコミュニケーションしているとは言えないし、話題が展開してゆくこともない。

ここを最初に押さえておくことで、この教室が目指すものを明確にする。無口、口べたを自称する者は「聞き上手」になれば良い。そしておしゃべりな話し上手も、「聞き上手」にチャレンジすれば良い。

再度断っておくが、ここにコミュニケーションについての専門的見解が込められているわけではない。専門としてコミュニケーションを学んだことはないし、研究者として深めたこともない。内容はきわめて個人的で、主観的かつ実利的なものだ。

中心的に届けたいと思っているものも、コミュニケーションに関わる情報や分析ではない。受講生達それぞれの、これからの人生におけるコミュニケーションスタイルの「体験拡大学習」だ。

小耳に挟む豆知識や断片的な言葉ではなく、そこに身を置いて、相手に自分の姿が見える場所で向き合うところから始まるコミュニケーション体験における気づきである。

SNSと対立したいわけではない。10年以上も前から続けて行ってきた授業なのだから、昨今のSNS批判とも直接関わりのあることではない。

社会や時代のテーマにきちんと向き合っていれば、それが時代の焦点とシンクロするのは必然である。

近年、関心を持たれることも多く、「コミュ障」などと称されるカテゴリーも存在する。本当にそんな分類がなされなければならないかどうか疑問だが、そういうことを切り取りたい動機は世間にあふれている。

私に言わせれば、練習や訓練もしないで、未熟なままを持ち味、個性と定義して、それに診断をつける。全くばかげていると思うし、当事者だと思う者が、そういうことを甘受していなくてもいいのである。まずは、上手くやれないことや問題を感じている事があつたら意識化する。そしてその改善のためのエクササイズを自ら実施する。

最初から上手くやろうとしたり、上手くやれることだけを選ぶのは、現実感を欠いている。そんなレベルで持っている自信や自尊感情など、お山の大将のそれである。

何でもそうだが、繰り返しの練習は不可欠だ。ろくに手順も学ばず、上手くいかない体験を繰り返し、追い詰められたりする人があるが、クールに言えば、失敗する練習をしているからだ。

その結果、病気になったりトラウマになったりと語るのだとしたら、それは目標が達成されていることになる。だから、それが目的でないのなら、やり方は他にある。

受講生の一般的な特徴として、自分のコミュニケーションに課題があると思っている人が多い。一方、自信を持っていて、だからこの授業に関心を持った人もある。

どちらにせよ、あるいはその中間にあるにせよ、序盤のエクササイズでは、この講義を選択した思い、動機の話のところで、このテーマは登場しやすい。しかし、この

テーマは、とても個人の内面的特徴話と親和性が高い。放っておくと、悩みの打ち明け話のような自己解説があふれる。私はこの類の対話を、意義深いものだと思わない。

むしろ、自分のことをよく知らない相手に、己の思い込みを蕩々と語ることで、たいした根拠もない先入観を相手に植え付けているだけだと思っている。

だからそんな話になりがちな自己紹介プロセスは重視せず、こんな解説をしておく。

『自分は口下手だから・・・』とか『こういう授業形式は苦手で・・・』とか、「関西生まれではないので、話にオチがなくて・・・」等と、己のネガティブキャンペーンはやめなさい。

教室で初対面に近い他人に、開口一番、自分の不具合解説を延々とするのは悪趣味である。

人は自分が語ったように人生を生きる場所があるものだ。ナラティブの考え方が、当然だろう。『自分は無口なもので・・・』と解説したら、その後どんなに話が弾みかけても、無口だと説明したこととのつじつまが気になるだろう。

君がどんな人に見えるかは、君が解説するのではなく、相手が見立てればいいことだ。君がもし、友人、家族の中で無口で、陰気くさいやつだと思われているとしたら、そのイメージを覆すのは簡単ではないかもしれない。頑張っても、冷やかされるのがオチかもしれない。

しかし今、目の前に居る人に、そんな先入観はない。ならば、本当はこんな風に他者と過ごせたら・・・と願っている自分に近づく努力を、一歩でいいから始めれば良

い。

それを見ても、初対面の人が冷やかすことはないだろう。相手が自分に持っている先入観やイメージは、自分への呪縛である。

人は自分が語ったように生きる場所がある。だからって自分のトリセツ（取扱説明書）を過去の自分ばかりを材料に、決め込まなくてもいい。

パート 3

二回目の課題は、引き続き初回の流れで、未知の人と組みになって語ることである。

今日のエクササイズ

二人一組

(勇気を出して、面倒がらずに友人以外を選ぶこと)

必ず場所は移動する！

二分間

今日のテーマ

「私の好きなもの、私の興味のあること」

A × B

相手は知らないこと、
興味が持てないことの場合もあるが、
解説をする。

きっかけ、どこが面白いのか、
どんなことが起きるのか。

聴き手は、興味を持って質問する。

このテーマで交代で会話をする。そのとき、題材として、相手も知っていそうなことを選ぶという社交をしない。

自分は面白がっているが、相手は聞いたこともない趣味やスポーツの場合もある。

今回の課題は、相手の話すことがよく分からないときや、興味のある部分が登場し

たら、どんどん詳細を質問することである。

受けそうな話題を選んだり、わかりきっていることだからと、だらっと聞き流さないことが大切である。

パート4

授業の最後は前回同様のミニレポート作成である。内容にはこだわらない。広く授業内での体験からの振り返りや質問を書く筆記時間12分をめどに、授業全体を進めてきている。

最後は自分の書いたものを教壇に提出して、静かに退室する。

全般に男子学生は早いし、授業へのコミット度合いの低い者がさっさと書いて出て行く。その顔ぶれや、所要時間も、授業の進行と共に変化してゆく。

まさしく、人は成長してゆくのである。そして、まさかこんなことが自分に起きるとは思わなかったと振り返る学生が少くない。

私は学びの成果とはこういうことだろうと思っている。試験などで誰かに評価されて、初めて分かる成長や変化がないとは言わないが、余り関心はない。

今、教室の中でだけ、自分の内面だけでの気づきになっている事が、しばらくすると、自分の世界のあちこちで起き始める。

結構な頻度で彼らの周囲の人達が気づく。そんな授業って、そうなのではないかと密かに自慢に思っている。